国立大学施設探訪
～近代の記憶　そして未来へ～

第2回

内田ゴシックのキャンパス

東京大学大学院工学系研究科社会基盤学専攻助教
尾崎　信

昨夏、私は再び本郷キャンパスの住人になりました。一度目は学生の時。その後4年半、都市計画やまちづくりを専門とする民間コンサルタントに勤め、疲弊した地方都市――シャッター街と化した中心市街地や、新建材のペラペラな住宅が立ち並ぶ古都――を相手に、どうすればよいか悪戦苦闘していました。そして今、思いもよらず本郷キャンパスにそのヒントを得ています。

内田ゴシックの工学部一号館

本郷キャンパスには大正末期から昭和初期の建築物が多く残っています。その大部分は、当時の建築学科教授であり、本学の営繕課長でもあった内田祥三とその弟子たちの設計によるものです。これは、大正12年の関東大震災によって壊滅的な被害を受けた本郷の再建を、内田が一手に引き受けていたためです。これらの建築物の意匠は、ゴシック様式に内田独自のアレンジがなされていることから、「内田ゴシック」と呼ばれています。

内田ゴシックの真髄は、その美しさにはありません。建築単体の意匠で言えば、もっと美しいゴシック建築は数多くあるでしょう。見るべき点は、建築単体ではなくその総体です。つまり、建築物群が樹木とともにキャンパスの骨格となる空間を連続的に構成している点において、またそれらの織りなす空間の質の高さにおいて特筆すべきものがあるのです。私には、内田は建築を設計することを通じて、その外側の空間こそをデザインしていたように思えます。そしてその外部空間は、時とともに風化するどころか、風雨に耐えて味わいの出た建物外壁の表情や、悠然と枝を伸ばす樹木とともに、むしろ魅力を増しているのです。

内田は、常に建築費の一部を外構の整備費に充てたと言います。このところからも外部空間を重視していたことがわかります。また、東京大学の施設と言えば細部までうるさくこだわる時代であったにもかかわらず、あえて外装に色が不揃いのタイルを選択したのもその意匠的な面白さだけでなく、震災直後の資金・時間不足の中で、建築物単体よりキャンパス全体の完成度を優先させたためではないかと思われます。

ひるがえって、地方都市。外部空間の質を高める建築や、時とともに味わいを増す建築が、一体どれだけあるでしょうか？　近世・近代建築はともかく、こと現代建築に関しては、目を覆いたくなる状況です。これからの地方都市には、内田のような視座が必要ではないでしょうか。つまり、建築物がつくる外部空間が時とともに魅力を増し、私たちの子どもや孫の世代までをも迎え待つ存在となるべきだと思うのです。およそ三四半世紀の間、私たちを待ち続けてくれた内田ゴシックのキャンパスを歩きつつ、そんなことを思います。